

マルサスの流通主義について

遊 部 久 藏

I

『人口論』の著者としてのマルサスについては従来くわしい研究がみられるが、理論經濟學者としてのマルサスについてはあまりくわしい研究はみられない。しかし、いうまでもなく理論經濟學者としてのマルサスは、こんにち『人口論』の著者としてのマルサスにまさるともおとらぬ重要性を有している。というのは、私たちはマルサスの論理のうちにある意味で「近代經濟學」の原型を見出しうるからである。もっともこの點についてはすでにケインズ¹⁾、マックラケン²⁾の先驅的指摘があるが、小稿においてはこれらの論者とは甚だしく對蹠的立場からマルサスの論理の特徴を解明することとする。

従来マルサスの經濟理論が充分研究されなかった理由として、しばしばその難解であることがあげられている。たしかに彼の論理は難解である。しかも時代的變遷があるだけではなく、全體として一見矛盾に富んでいるようにも考えられる。したがってマルサスの論理を全體として把握するためには、まず彼の方法ないし觀點とみなされるものをはじめに手がかりとして摘出する必要があるであろう。私たちはこのようなものとして流通主義こそ彼の全發想法を規定するものであると思う。

それでは流通主義とはなにか？ まずこの點の説明から入っていきたいと思う。流通主義とは流通の觀點、流通に踞する觀點である。かりに經濟學の對象が資本の再生産過程であるとすれば、それは本來、生産過程と流通過程との統一であるはずである。しかるに流通主義に立脚するかぎり、このような統一にある流通過程のみが抽出されて

そのみが考察の對象となる。いな、さらにすすんでは、生産過程そのものが流通過程的にあつかわれる、あるいは生産過程が流通過程と混同される。いったい流通主義はマルサスにのみ固有なものではない。古典派經濟學にもしばしばそれはみうけられるのである。重商主義者は代表的流通主義者である。また「近代經濟學」のいちぢるしい特徴として流通主義があげられる。(そういう意味でこそマルサスの論理はその原型なのである。)したがっておよそマルクスの立場以外は多かれ少かれ流通主義的色彩をおびているといえるが³⁾、マルクスは『資本論』第2巻「資本の流通過程」の分析にさいしては、かえってこの方法を意識的に使用することによって非常に成功をおさめているのである。すなわち第1巻において資本の直接的生産過程を抽象してこれを孤立的に考察したマルクスは、第3巻において資本制生産の總過程を分析しているが、いわばこの兩者の媒介——中間項として第2巻においてもっぱら資本の流通過程の研究がおこなわれている。しかしこの場合、いちおう生産過程の分析を経過しているので實際上生産過程もまた視野のなかへふくめられることとなるが、しかしたとえば個別的資本の生産過程と流通過程との差異は資本循環上の單なる形態の差異として(第1篇)、また資本回轉上の單なる時間の差異として(第2篇)、さらに社會的總資本の再生産は、その單なる實現という觀點から考察されている(第3篇)にすぎない。これはあきらかに流通主義である。ただマルクスの場合は、それが方法上の自覺をともしつつ明確に意識的になされているという根本的相異がある。

3) もっともマルクス經濟學者のなかにも流通主義者はいる。それは日本および外國の社會民主主義者の經濟理論の一特徴である。その批判は別稿でおこなう豫定である。

1) J. M. Keynes, *Essays in Biography*, 1933.

2) H. L. McCracken, *Value Theory and Business Cycles*, 1933.

流通主義は經濟學の方法としての上向法の缺除と關連する。すなわち表象に最初にあたえられた具體的事實をより簡単な諸關係へと分析していき、ふたたび出發點へと思惟の上で再構成するということがおこなわれなない。もともと流通過程こそ私たちの表象にあたえられやすい局面である。これに反して直接的生産過程はむしろ觀察することが困難な、國民經濟の深奥部分をなしている。それにもかかわらず生産こそ、分配や交換や消費にたいして規定的契機であり、また包攝的契機である⁴⁾。だからマルクスは、「近代的經濟の現實的科學は、理論的考察が流通過程から生産過程に移行する場合にはじめて始まる⁵⁾。」とのべたのである。したがって、また、考察の對象ないしは觀點が（無自覺的に）生産過程から流通過程へと移行するにつれて、經濟學の俗流的性格はふかまるというであろう。重商主義の流通主義は重農學派および古典派經濟學によってしだいに克服されていったが、マルサスにおいて私たちはその反動——流通主義への復歸——を見出す。

流通主義と關連する抽象の缺如という點については、マルサスの自認する經驗主義的方法がこれをもたらしたといえよう。『經濟原論』緒論はこのようなマルサスの方法を端的に示すものである。マルサスはそこで經濟學が他の一般諸科學に比して嚴密科學の確實性に一層富んでいることをみとめるが、「單純化および一般化の傾向」(the tendency to simplify and generalize)がこの科學の發達を阻害してきたとみる。「經濟學は本質的に實際的であり、そして人生の普通の事務に適用せられうるものである⁶⁾。」したがって經濟學者はつねに「事實と經驗」(facts and experience)にうたえてその理論を検證しなければならないのに、「單純化および一般化の傾向」は1つ以上の原因をみとめないという結果をもたらすのみならず、

また修正(modifications)、限定(limitations)および例外(exceptions)をみとめないという結果をもたらしている。これこそマルサスのもっとも忌避するところである。なぜなら「複雑な諸原因の頻々たる結合、原因と結果との相互間の作用と反作用、および多數の重要な命題における限定と例外との必要が、この科學の主たる困難をなし、且つ結果の豫言にあたって生ずることをみとめなければならぬ頻々たる誤りを惹起する⁷⁾」からである。「哲學の第一に行うべきことは、事物をあるがままに説明すること(to account for things as they are)である、そして我々の理論がこれをなしおわるまでは、それはなんらかの實際的結論の基礎となつてはならない⁸⁾。」ここにマルサスの經驗主義が端的に示されている。「事物をあるがままに説明すること」！もっともマルサスもあまりに事實と經驗とにたよりすぎる場合に結果する缺陷——たとえば單に共存する偶然的な要因を原因とみなすような——をみとめ、むしろ兩極端の方法の中間をすすむべきであるともいっているが、しかし彼の眼目が事實上「單純化および一般化の傾向」の克服にあることはいうまでもない。

マルサスののべていることは極めて抽象的な意味においてはただしいであろう。經濟學が經驗科學として事實と經驗とをおもんじるべきは當然である。しかし「單純化および一般化の傾向」としてリカードオの體系が攻撃目標としてかけられ、それとの對立意識のもとに彼の實際の理論が展開されていくと、彼自身が氣附いている「反對の種類の誤謬」が露呈してこざるをえないのである。

そこで私たちはマルサスの體系と對立しているリカードオの體系に方法論的觀點から一瞥せざるをえない。いったいリカードオの理論の源泉であるアダム・スミスの體系に2つの傾向、すなわち大乗的傾向と小乗的傾向とが存すること

4) K. Marx, *Einleitung zur Kritik der politischen Ökonomie*, 2.

5) K. Marx, *Das Kapital*. Bd. III. Volktausgabe besorgt vom M-E-L-Institut. S. 369. 長谷部譯, 青木文庫, 第9分冊. p. 478.

6) T. R. Malthus, *Principles of Political Economy*, 2. ed. 1836. p. 9. 吉田秀夫譯, 上卷. p. 26.

7) *ibid.* p. 6. 譯. p. 21.

8) *ibid.* p. 8. 譯. p. 25. なおマルサスの1817年1月26日附リカードオ宛書翰をみよ。そこに曰く「私はたしかにひとの著述をして社會にとって實際上有用ならしめる唯一の方法として、あるがままの事物にしばしば訴えるというかたむきがあります。」(Keynes, *Essays in Biography*. 1951. p. 116.)

は、すでに従来しばしば指摘されてきたところである⁹⁾。いわば前者は本質洞察的行き方であり、後者は現象記述的行き方である。スミスの論理を特徴づける多くの矛盾と混亂とはこの2つの行き方が無造作に並存し、交叉していることに由来する。(例えば、彼における投下労働価値説と支配労働価値説との並存、剰餘価値説と譲渡利潤説との並存、生産的労働の諸規定の並存などをみよ。)これは一面彼の論理の偉大な全體的性格を示すものであるが、極く大雑把に云ってこのような2つの傾向が相分かれて、1つはリカードオによって繼承され、1つはマルサスによって繼承されたといつてもよいであろう。本質洞察的行き方は生産過程への降下を可能とし、ここに生産の観点を確立する。そのような意味で「近代的經濟の現實的科學」はリカードオにいたって一層洗練され、淨化された。もっともここで一言しなければならぬが、生産の観点到に立脚するということは必ずしも生産過程の分析に終始するという意味ではない。リカードオにおいてはむしろ生産過程そのものの分析はとぼしい。リカードオの『經濟原論』中にたとえば『資本論』第1巻において展開された剰餘価値論を見出そうとしても徒勞におわるであろう。しかもそれにもかかわらず、リカードオにおいて事實上相對的剰餘価値論が存在することは、『剰餘価値學說史』第2巻においてマルクスの指摘するごとくである。このような意味でリカードオが生産の観点到に立脚すると類推されるのである。(なお投下労働価値説の堅持についても同様のことが云えよう。)しかしそれはあくまで直接的生産過程の観点到であって、それが媒介されるべき流通過程は却って單に假象として追拂われるにいたった。しかしこれではいまだ眞に現實的科學であるとはいえない。生産過程は流通過程をも包攝し、全體として再生産過程であるから。しかるにここにリカードオと對蹠的に流通過程のみに據って經濟學の建立を企てたものがほかならぬマルサスである。こ

の場合には、逆に流通過程が媒介される根源的な生産過程が見失われてしまう。これはまた前者に比し一層一面的な把握であると云わねばならない。結局、この2つの方向を統一して眞に現實的科學をうちたてたものはマルクスであるが、このことは前述の『資本論』の篇別の簡単な説明からしても推察されるであろう。(したがってマルクスを以てリカードオの系譜に直接つらなるものとはしえない。)

マルサスとリカードオとの兩體系を本質的に峻別するものは、マルクスにおいて止揚され統一されるにいたった2つの観点的差異にほかならぬのであって、それが結局、マルサスにおいては競争規定を固執せしめ、リカードオにおいては價值規定を固執せしめることとなる¹⁰⁾。したがって例えばマックラケンが兩體系の區別を短期と長期、不均衡と均衡の體系にもとめるのは¹¹⁾、いまだ根本的區別ではないと思われる。

II

このようなマルサスの流通主義をリカードオの生産の観点的との對立においてみずから全體的に示すものは、彼がマカロックによって執筆された『大英百科全書』中の「經濟學」の項目を批評した一文である¹²⁾。彼はこの一文においてリカードオおよびリカードオ學派を目して「經濟學の新學派」(the new school of Political Economy)とよび、その原理を「新原理」(the new principle)とよんでいる。その底意は、リカードオの體系を

10) 「マルサスはアダム・スミスの弱い方面に立脚して、アダム・スミスの強い方面に立脚して建設されたリカードオの理論にたいして1つの反對理論を建設しようとしてつとめている」(Marx, *Theorien*, Bd. III, S. 51. 譯, 『マル・エン全集』第11卷. p. 65. なお *ibid.* Bd. I, S. 152. 向坂譯. pp. 162—3. 参照。)

11) McCracken, *Value Theory and Business Cycles*. p. 13.

12) Malthus, *Essay on Political Economy. Supplement to the Encyclopaedia Britannica*. Vol. VI, Part I. Edinburgh. 1823. *The Quarterly Review*. January, 1824. 所載。この論文については、すでに高橋誠一郎教授の研究がある。同著『經濟學史』上卷. 昭和12年. pp. 472—88.

9) K. Marx, *Theorien über den Mehrwert*, herausgegeben von K. Kautsky, Bd. II, Tl. I, SS. 2—3. 大森譯. pp. 12—3. なお *Kapital*. Bd. II, S. 380. 譯, 第7分冊. pp. 492—3. 参照。

以てスミスの體系と區別されるべき異端的なものとしてしりぞけ、マルサス自身こそその正系であるとするにあるようである。彼は「新學派」を特徴づける主要な論點として3つのものをあげている¹³⁾。

(1) 諸商品に支出された労働量はその交換価値を規定する。

(2) 需給は獨占の場合、あるいは短期間についての外は、價格および価値に影響しない。

(3) アダム・スミスによつてのべられた原因、すなわち資本の相對的夥多および競争を全く排除して、土地における生産の困難を以て利潤の規制者とする。

そこでマルサスはこれらの論點を逐一批判していくのであるが、ここで重要なのは、マルサスの批判のプロセスそのものよりは、むしろこの批判の立脚點である。すなわち、これらの批判を通してマルサスの流通主義的觀點が露呈してくるのである。とくに彼は三論點中の第1のものを以て決定的であるとみなし、他の論點はこれより直接かつ必然的に發出するとみなしているが¹⁴⁾、このことはそもそもなにを意味するであろうか。結局、「新學派」の致命的缺陷は、偏狹な投下労働價值説——これによつては需給および資本の相對的寡多や競争の結果を包含しえない。——に立脚する點にあるというのであり、したがってまた自己の支配労働價值説こそスミス價值論の正統的繼承であるとみなしているのである。

そこで小稿においては、マルサスの價值論を中心として彼の流通主義を検出してみたいと思う。ちなみにミークの次の一文によつても、私たちのくわだてが方法的に正しいことが示されていると思う。曰く「マルクスおよびエンゲルスがマルサスにたいして行った最も重要で一般的な告發の一つは、經濟理論をあつかうにさいしてマルサスが市場現象の表面的局面にほとんどもっぱら關心をもち、その背後によこたわる眞實の社會關係については全く關心をもたないか、あるいは知ってさえいないということであつた。この外觀のみに

13) *ibid.* pp. 307—8.

14) *ibid.* p. 332.

たいする關心は、マルサスをして最も卓越した『俗流』經濟學者として特徴づけるものであるが、それはとくに彼の價值論および利潤論においてあきらかであつた¹⁵⁾。」

いったい價值論上のマルサスの位置は、支配労働價值説、または需要供給説、または生産費説などの維持者あるいは代表者として評價されてきたのであるが、このような評價は極めて一面的な考察によるものである。私たちはむしろすすんでマルサスには價值論は存しないという斷定をくだしうるかと思う。あるいはすすんでマルサスは最初に價值論無用説を抱懷したものであるといつてよいかと思う。しかもマルサスをしてこのような見解をいだかした根據は古典派經濟學の見解のうちこれをさかのぼりうるであろう。

マルサスが晩年の一論文¹⁶⁾において意識的に「價值」という言葉の使用をさけて價值論——通常的にして平均的な支配労働量のみが一切の商品の供給の自然的にして必要な條件を代表し尺度するというすでに『價值尺度論』において示された見解の布衍——を展開しているという事實は、あまりしられていないようである。その結論にのべていう。「この論議において私は故意に價值という名稱の使用を避けた。次のことを示すのが將來の論文においては私の目的となるであろう、すなわち、たやすく理解される使用價值とは關係なく、我々が價值という名稱によつて任意の瞬間における労働諸生産物の相互の比例關係以上のなにものかを意味せしめるときにはいつでも、我々がいくらか首尾一貫して意味せしめうるのは、労働諸生産物の供給の自然的にして必要な條件であり、それらを再生産するのに相應であるところの價值のみであるということ、これである¹⁷⁾。」

ここにはマルサスの價值概念が端的に示されているのであつて、この方が價值という用語を使用

15) L. Meek, *Marx and Engels on Malthus*, 1953. p. 32.

16) Malthus, *On the Measure of Conditions necessary to the Supply of Commodities*. Transactions of Royal Society of Literature of the United Kingdom. Vol. I. 1827.

17) *ibid.* p. 180. 傍點引用者。

しなかったという事実よりもより一層注目にあた
いするかもしれない。すなわちマルサスによれば、
価値は一般に商品の交換上の比例関係を意味する
のであって、それはとりもなおさず交換価値であ
る。『経済原論』(第2章第1節)においてはマル
サスはスミスにおけると同じく価値の分類という
平板な見方から出発して、価値に使用価値と交換
価値との二種類が存することをみとめ、後者につ
いて「名目的な交換価値」(nominal value in
exchange) または価格と「内在的な交換価値」
(intrinsic value in exchange) とに分けて、特別
に附言されないときは価値とは「内在的な交換價
値」を指すという。それでは「内在的な交換価値」
とは何であるか。それは「内在的原因から生ずる
購買力」であり、「それを所有しようとする願望お
よびその所有を獲得する困難にもとずいてなされ
るところの一商品の評価¹⁸⁾」であると定義されて
いる。また『経済学における諸定義』においては、
「価値、すなわち交換価値」(value, or value in
exchange) の定義としてつぎの如くのべられてい
る。曰く「一対象物の、ある他の対象物または他
のもろもろの対象物との交換上の関係にして、そ
れぞれの対象物にたいする評価に依存する。第2
の対象物が明示されない場合には、一商品の価値
は、當然に、この評価を決定する諸原因およびそ
れを尺度する対象物と関連せしめられる¹⁹⁾。」

価値と交換価値との區別は古典派経済学におい
ても明確ではなかった。それというのも価値形態
論の缺如によるものであるが、リカードオにおい
ては事實上その區別へ到達している。相対的価値
(relative value) にたいする絶対的価値(absolute
value) の觀念がこれを示すのであるが、しかしそ
れが原理的に確定されたというよりは、むしろ一
商品の価値の變動と交換価値の變動とが必ずしも
合致しないという、要するに相対的価値形態の量
的規定性への注目がそれを可能ならしめたにとど
まる。周知の如くリカードオはしばしば意識的に

相対的価値論に逃晦しているのである。したがっ
て同じ時代に同じ傳統を背景に有するマルサスが
価値と交換価値とを混同したとしても自然である
が、マルサスの場合は、その流通主義のゆえに全
く交換価値概念一本となり、価値概念の喪失が結
果している點が特徴的である。詳言すれば、リカ
ードオにおいてもマルサスにおいても価値と交換
価値との原理的な區別(質的な區別)は存しない
のであるが、リカードオにおいては生産の觀點に
立脚することによって価値規定をうちたてること
となり、おのずから価値概念を想定することとな
るが、マルサスにおいてはその流通主義的価値論
のゆえにこのことが全く不可能とされた。

流通主義的価値論はもはや価値論の實質をもた
ないものである。なぜなら、この場合、対象とさ
れるものは、もはや価値ではなく、いな交換価値
そのものですらなく、現實の交換比例すなわち市
場価格であるからである。このような市場価格が
さしあたり需給の関係によって決定されることは
いうまでもない。したがってマルサスは価値の規
定者として需給の関係を見出す。そして生産費は
單にその從屬的契機とされる。「需給の大原理」
(the great principle of demand and supply),
「需給の大法則」(the great law of demand and
supply) という表現はけっしてマルサスにとって
誇張をふくんだものではないのである。だがここ
にはもはや価値論は消滅してしまう!!

テュルジョンはのべていう。「じっさい、彼(マ
ルサス——引用者)は価値の問題を価格の問題か
ら分離しない。人は同じく彼が価格を越して価値
を見出していないし、研究していないと云いうる。
このレアリスムの過剰こそ彼の學說の弱點である
²⁰⁾。「このレアリスムの過剰」(cet excès de
réalisme) ! これこそ流通主義を、經驗主義——
現象記述的方法を意味するものであろう。テュル
ジョンはさらにいう。「かくして、我々の示した
如く、マルサスは生産費を需給の均衡に從屬させ

18) Malthus, *Principles*. 2. ed. p. 60. 譯, 上卷.
p. 108.

19) Malthus, *Definitions in Political Economy*.
1827. p. 235. 玉野井芳郎譯. p. 173.

20) C. Turgeon et C. H. Turgeon, *La Valeur d'
après les Économistes anglais et français depuis Adam-
Smith et les Physiocrates jusqu'à nos Jours*, 2. éd.
1921. p. 152.

ることによって、価値を市場でそれが蒙る變動を通して研究することによって、いわば価値論を價格論に鎔解する。そして彼はこの見地に斷乎としてとどまっている²¹⁾。」

このような意味で私たちはマルサスを以て価値論無用説の先驅者とみなすことができる。マルサスは實に——ホイッティカーののべる如く²²⁾——イギリスの傳統的労働価値説の最初の排撃者たる資格において、価値論そのものの否定者となるのである。なおマルサスの価値論は市場の客觀的事象の分析に終始するのみでなくそこでの人間心理の分析をも意圖したという点において、彼のオーストリア學派にたいする親近性を指摘する見解の存することにも注目する必要があるであろう。マックラケンはこのべていう。「マルサスの試みは価値の問題に需要の側面から接近し、效用ないし主觀的価値に主要な考慮をはらっているところのオーストリア學派へ到達する²³⁾。」又曰く「マルサスの支配価値説はオーストリア學派によつて發展させられた限界效用価値説の先鞭をつけるものである²⁴⁾。」ひとはここにオーストリア學派の価値論が本來の価値論の任務を全く抛棄したものであることを想起する必要がある。

III

しかしそういうマルサスではあるが、それにもかかわらず、彼が価値論を有するかのよう²⁵⁾に考えられるのは、彼における生産價格の存在の是認と価値尺度の探求とによるものである。

21) *ibid.* p. 157.

22) A. C. Whitaker, *History and Criticism of the Labor Theory of Value*. 1904. p. 80.

23) McCracken, *Value Theory and Business Cycles*. p. 14. じじつ、マルサスの初期のパンフレット、『食料高價論』 *An Investigation of the Cause of the present High Price of Provisions*. 1800. における價格論は限界購買力による市場價格の決定論であつて、それはバーム・バヴェルクの有名な「限界對偶」の評價による馬の價格の成立の説明を連想させる。ケインズのこのパンフレットにたいする評價をみよ。Keynes, *Essays in Biography*. pp. 102—3, 105—6.

24) McCracken, *Value Theory and Business Cycles*. p. 135.

価値の存在を否定したマルサスではあるが、価値の轉化形態である生産價格まで無視することはできなかつた。「けだし、生産價格は商品価値のすでに全く外面化された、また明かに沒概念な形態だからであり、競争において現象し従つて俗流資本家の意識中に一したがつてまた俗流經濟學者の意識中に一現存するままの形態だからである。」²⁵⁾また自然價格に關する古典派經濟學の命題を無視することもできなかつたのであろう。マルサスのいわゆる「自然價格」(natural price. ちなみにこれは自然價值 [natural value] の貨幣的表現である。), 「必要價格」(necessary price), 「通常價格」(ordinary price) は生産價格を意味する。(初期のパンフレットには price of production, growing price の語が見出される。) その内容は「基本的生産費」(elementary costs of production) = 前貸 (蓄積労働プラス直接労働) プラス通常利潤であるが、後者はまた「商品の供給の諸條件」(conditions of the supply of commodities) と同一義であるとされる。前引の晩年の一論文の一節において將來「價值」の用語によって交換價值以上のものを意味せしめるといわれているのは、すなわち生産價格のことである。このような意味で前述の如く生産費は需給關係の一契機でしかないとされるが、さらにすすんで需給が生産費そのものを積極的に規定するともみられている。曰く「利潤を生産費にふくめるとすれば、労働の価値の不變性からして、當然通常利潤は、同一労働量の生産物の、通常供給と比較しての通常需要によって決定せられることになるから、需要と供給とは、……生産費に有力に参加し、それゆえにまた價格および価値にかんする需要供給の地位は絶対に普遍だということが、確實なる結論としてひき出されねばならない²⁶⁾。」

したがって市場價格のみならず自然價格もまた「需給の大原理」あるいは「需給の大法則」によって規定されるとみられる。「しかしもしこれ〔生

25) Marx, *Kapital*. Bd. III. S. 225. 譯, 第9分冊. p. 295.

26) Malthus, *The Measure of Value*. 1823. p. 58. 玉野井芳郎譯. p. 56.

産費の需給関係への従属——引用者]が眞實であるならば需給の大法則はアダム・スミスが市場価格とよんだものと同様に自然価格とよんだものをも規定するために働かされるのである、ということになる²⁷⁾。」要するに自然価格と市場価格とを區別する唯一の相異點は、自然価格は需給の「通常的且つ平均的比例」または「より恒久的且つ通常的狀態」によって規定され、市場価格は需給の「異常且つ偶然的比例」または「現實的且つ一時的狀態」によって規定されるということである。²⁸⁾かくして自然価格が價值の轉化形態として有する内在的な固有の論理は全く看落されてしまう。これは流通主義の歸結である。しかるにリカードオは自然価格を無媒介的に價值と同一視するという誤謬をおかしてはいるものの、これによって市場価格と明確に區別しえたのであって、この點は兩者間の一爭點をなしている。ちなみに兩者の大宗であるスミスにおいては、自然価格が市場価格から區別されつつも、實際上競争の捨象という點においてそれが不徹底であった。しかしそうかといって、マルサス自ら主張する如くマルサスを以てスミスの正統的繼承者とすることはできないであろう。

價值概念そのものを事實上否定したマルサスが價值の尺度を苦心して探求しているということは一箇の矛盾にちがいない。しかしまたこれによってあたかもマルサスが價值論支持者であるかのような假象が成立したのである。元來價值の尺度には2つの種類があげられる。1つは一商品に内在的な尺度である。1つは外在的な尺度である。しかし價值形態論を有しない、したがって價值と交換價值との關係の明確な把握の存しない古典派經濟學においては、この兩者の區別と移行關係とが明確でない。流通主義者マルサスにおいては一層そうである。さらに彼は價值と生産價格とを混同し前述の如く、商品に内在的なものとして價值ではなくして生産價格(=自然價格)のみをみとめ

ている。ここに價值法則がマルサスによってあたかも克服されたかのように考えられる根據が存するのである。すなわち商品の相對價值としてマルサスの關心をとくに惹いたものが生産價格であることはリカードオにおけると同様である。ただリカードオは價值法則を以て原則とみなし、その修正(生産價格の價值からの乖離)を以て例外とみなしたのに、マルサスは反對に資本主義社會においては原則が例外となり、例外が原則となることをみとめているのであって、この點はマルクスも指摘しているように²⁹⁾、マルサスの方が正當なのである。リカードオは價值の生産價格への轉化を強引に無視して價值規定を固執したために價值規定そのものが抽象的なものとなってしまった。しかしマルサスにおいては結果はなお悪かった。というのは、マルサスは例外とともに原則までくつがえしてしまつたからである。いな、くつがえしてしまつたと自認したからである。結局、價值と生産價格との關係についてのリカードオとマルサスとの把握は内容的に極めて相似たものでありながら、兩者の立脚する觀點の相異、生産の觀點——價值規定と流通の觀點——競争規定とによって全く正反對の歸結にみちびかれたといつてよからう。

價值の尺度(じつは交換比例の尺度)として投下労働量を否定したマルサスは當時の傳統的な不變の價值尺度論の立場からいくつかの尺度を選択していき、ついに支配労働量において最も理想的な尺度を發見する。支配労働量が價值尺度としてえらばれるプロセスもきわめて流通主義的な誤謬にみちているといわねばならない。すなわち流通主義の結果として商品流通が資本流通と混同され、資本としての商品の評價が商品としての商品の評價にまで擴充され、一般に商品によって支配される(あるいは購買される)労働量はその價值の尺度とされる。しかも、この場合、價值概念の缺如のゆえに、支配労働量は價值の尺度たるのみならず價值の規定者ともされるのである。すなわち一商品にはそれによって支配される労働量だけの價值があたえられることとなる。これは正統的

27) Malthus, *Principles*. 2. ed. p. 71. 譯, 上卷. p. 125.

28) *ibid.* p. 78. 譯, 上卷. pp. 137—8., p. 303. 譯, 下卷. p. 167. *Essay on Political Economy*. p. 320.

29) Marx, *Theorien*. Bd. III. S. 75. 譯. p. 88.

な価値概念に依據するかぎり理解の困難な事柄であるが、もともとマルサスにおいては価値とは單なる「評價」(estimation)の別名にしかすぎないことを想起されたい。支配労働=価値尺度説はむしろ彼の需要供給説の具體化にほかならないのであって、これによって市場關係をより適確に——資本の立場から——把握しようとしたものにすぎない。彼が商品の自然價格と市場價格との區別に照應させて価値の尺度としての支配労働量に通常的支配労働量と現實的支配労働量とを區別しているのは、これを示すであろう。

マルクスによってマルサスの經濟理論の二大功績として労働と資本との不等價交換をみとめたことと、一般的供給過剩 (general glut) の存在を肯定したことがあげられているのは周知の如くで

あるが、たちいってみれば、それらはいずれも彼の流通主義の「怪我の功名」にほかならないのであって、その根據はきわめて薄弱である。それゆえに剩餘価値の生産を一方では流通の觀點から労働と資本との不等價交換として把握しながら、他方では支配労働価値説のおのずからの歸結として讓渡利潤説に顛落し、また一方では一般的供給過剩の存在を肯定しながら、他方ではその肯定が單なる商品流通の立場からなされていることのおのずからの歸結として有效需要の人為的造出——不生産的消費の獎勵によってこれを止揚しうるかのように夢想しているのである。³⁰⁾

30) マルサスの剩餘價值論および再生産論の批判については、拙著『古典派經濟學とマルクス』第4章第3, 5節参照。